

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

タガログ語と大日本帝国語 津野海太郎 26

カラワン楽団はよみがえる 八巻美恵 12

水牛楽団のページ 11

ポーランドの地下小説 ノヴァコフスキ 工藤幸雄訳 2

ポーランドの地下小説

マレク・ノヴァコフスキ

工藤幸雄訳

バスのなかで

それは路線177のバスだった。ちょうどベルヴエデル通り（注1）を走行中のことだ。乗客たちはだまりこくっていた。ちかごろ人びとは口をきかなくなつた——以前は市営の乗りもののなかなら決まって小説や冗談、口争いが耳についたものだが。今はたとえ交差点の手まえて不意に一時通行どめをくらおうと、言い立てる声もない。どこやらへ向かう兵員輸送車と軍用トラックのながながと続く列にはばまれての立ち往生だった。

トラックの列が切れたと思うと、こんどはシートをかぶせた砲車は何台となく揺れながら通つた。しんがりのタンクローリーで長い列は切れた。ようやく通行どめが解け、バスはゆつくりと動き出し

た。凍りついたアスファルトをバスは用心ぶかく走つた。折りしもバスの左手に見えてきたのはソビエトの外交官や顧問たちの宿舍となつてゐる建物（2）だ。とりどりの高さの建物を見あげるような塀が取りまいてゐる。

「守りは固いぜ、ロスケめ」そう口にしたのは若い貧相な男で、すりされた毛皮帽をかぶつてゐた。

「こわいのかい、襲われるのが」（3）その声は意外な大ききさで車内に響いた。男は気がいじみた忍び笑いさえもらした。

周りの乗客の視線がそちらへ向けられた。しかしだまつたきりだ。

「あんた、なんて言った」沈黙を破るだれかの声かバスの前方から起こつた。肥つた小柄の男だ。やはり毛皮の帽子だが、剃り立てのつやのよい顔をしている。男は人を押しわけ、あらあらしく青年につめ寄ろうとした——青年は中央のドアのわきに立つてゐた。男は両の肘を突っぱつて行く。青年は明らかに度を失い、ドアをにらんでゐた。

運転手は初めからバックミラーで様子をうかがつてゐた。不意に彼はブレーキを踏んだ。いったん急ブレーキをかけたうえで、同じく乱暴にスピードをあげた。人びとは将棋だおしになつてどどつとばかり車の前方へ毛皮帽の男ごとなだれこんだ。男は踏みとどまろうとしたが、人なだれの勢いに足をとられ運転手の背にあるガラスの仕切りに押しつけられた。その瞬間、運転手の疲れきつた、ひげっぽい顔にかすかな微笑が浮かんだ。その笑いもすぐさま消えた。ハンドルをとられかねないつるつるの道の行く手にきつと目を向けたのだ。

毛皮帽のずんぐり男はもがくばかりで、どうにも身動きがとれない。そのうち両手で手すりをつかみ、脱出を試みた。それでもほんの一メートルほど動いて行きどまりだ。身障者用の補助席に腰かけた男の固い義足に道をはばまれたのだ。

うまく次の停留所がきた。ぎゅう詰めの人びとの体の重みで毛皮帽のふとっちは動けないままだ。ころを見はからつて運転手は計算器のかたわらのしかるべきボタンを押した。自動ドアが、しゅうと

音を立ててひらいた。中央のドアが真つ先にあく。ステップに立っていた若い貧相な男は、すばやくバスからとびおりた。(4)

毛皮帽のでぶは、人をかきわけ運転席に近いドアをめざした。容易なことではない。まっかな顔、ほえつかんばかりのブルドッグだ。肩をはずませている。運転手は冷ややかに男をながめやった。おとなしく待ってやる。男はようやく車をおりた。しばし四方に目を配ったが、くやしげな表情だ。若い男は影もなかった。あきらめた男は先へと急ぐバスの番号を手帳に書きとめた。

(1) この通りのゆるやかな坂を登りきるとワジエンキ公園のある大通りになる。

(2) ここはソ連大使館でもある。

(3) 大使館の向かい側にあるベルヴェデル宮は国家元首の公邸。一世紀半さかのぼれば、

ロシア皇帝の弟コンスタンチン大公の居所だった。一八三〇年十一月二十九日、一団の将兵によって夜討ちをかけられる。「十一月蜂起」として有名な反ロシア暴動が、

こうして始まった。

(4) 新型バスの出入口は進行方向の右側に前、中央(こちらが広い)の二つがある。両方とも乗り降り自由。

二〇二二四

強情つぱり！ その言葉がおのずと私の唇を衝きうごかした。

「勝てるものか」私は腹立ちをおさえながら彼に説明する。「どうにもならんさ。向こうはがむしや

らな弾圧でくる。ここにあるのは東方的な政治だぞ。年寄を信用しろ。この年まで生きて、その点では経験がある」

彼が応じる。

「揉みくちやにされ、首ねっこをへし折られた、そのせいでそんなにびくびくするんだ」

張り手をくらったにも等しい。血を分けた息子が父親に言える言葉か。

「このロクでなし」私は二の句も継げない。頭にのぼった血が、がんがんと鳴った。

嫁が気をきかせてグラスを満たした。家の者三人がテーブルをかこんでいる。下の孫はもう寝た。年上のはまだ床で遊んでいる。列車を並べている。うまく出来た玩具、外国製である。列車が動き出す。信号機のところまで停まる。また走る。

私の気がなごむ。なかなかの坊主どもだ。この孫たち。そこで、調子を切りかえる。

「よろしい、おまえの言うとおりだとしよう。尻ごみは禁物だとね。これまでやってきたように、これからもやるがいい。ただ、そのやり方だ、地下運動らしくやれ。おまえ、子どもらのことを考えたことがあるか。おまえには義務があるんだぞ。重大な責任がおまえにのしかかっている……」

嫁が割りこんできた。話の腰が折られる。すばり即答が用意されていたのだ。

「いざというときには、わたしがいつさい引き受けますから。なんとかしますよ、お父さまにご心配はかけません」

私は彼女に目を向けた。言うは易しだ。引き受ける、だと。笑わせるな。こんどの病気のあと、ついきざれしがちだ。痩せが目立ち、微熱がつづいている。いったい生活費をどこから工面する気だ。えっ、どこから。さっそく息子が助け舟を出してきた。

「万一の場合には、お父さんが加勢してくれますよね」

恥を知らん、近ごろの若い奴らときたら。物質面で年寄に甘える癖がある。

くつろいだ気分。日曜日のデイナーに招かれてきているのに、私のほうで無用に神経をいらだたせ

ている。なんとか気を持ちなおし、気楽に息子とグラスを合わせる。男と男の仲らしく。

「よく分かつているさ」私は言う。「ただし、がむしやはいけな。肝心なのは、しばらく待つことだ……」

「また、そんな」息子が片手をふる。「まえと同じ言いぐさだ。『何の成果も出つこない』、『譲歩すべきだ』、『与えられるものを取るしかない』、『さもないと踏みつけにされる』みんながそう言わなかつた!! 面白いわけながらも一千万人が入ってきたんだ。これは力ですよ、大したものだ」

石あたま。何も受けつけやしない。おやじに言われるとおりに出国していればよかったのに。私は弟に手紙を書いた。弟は何ひとつ心配ない暮らしをしている。ハンブルグに住んでもう二年目、喜んで役に立とうと言ってきた。居住権、仕事、その他の便宜のかずかず、そんな話が今は雨あられとポーランド人に降ってくる。息子は、そのとき私を笑った。

「国を捨てろ!! これからだという時機に!!」

これからだ、まぬけ。

この頑固ぶり。岩。これは父子相伝だ。私のも父親ゆずりだ。一時ならず私はそのおやじに殴りつけられたうえ、こう念を押されたものだ。

「もうよすか」私は応える。「よすものか」呪われた血、遣伝と呼ぶべきか……

「わしだって腰ぬけぢやない」私は再び戦列を立てなおし、筋道立った説法にかかる。「忘れもせんが、占領中、わしのところで印刷用紙を預っていたぞ。それもごっそりとだ。キツチンに石炭を入れる大箱があつて、そのなかにしまつてあつた。スターリン時代のことか。クワイアトコフスキに聞いてみる。公安にねらわれて、一カ月もうちの屋敷裏にかくまつてやつた。ほとんどだとも。見つかつたら監獄さ」

「そりや昔のことさ、あやしいもんだ」このくそつたれ、臆面もなく言い放つ。いたわるように微笑を浮かべる。嫁のほうに目くばせしてみせたようでもある。無力感が私をとらえた。しかも、ウオツ

力はいつこうに効いてこなかつた。いやな臭いがする。醜めてくるばかりだ。孫たちの明るい頭髪を見つめていると胸が痛む。末の子は天使みたいだ。あんなに安らかに眠っている。この子たちはどうなるやら。どんなおとなになるのだろうか。

せめて嫁がまともな女でいてくれたら。いかにも気性が激しすぎる。女らしい慎重さのかけらもない。全然。似た者夫婦とはこのこと、蕁みたいに燃えやすい。こうして私たちはテールブルについている。息子夫婦と私と。とかげでも見るようにこちらを見ている。穴からひよいと顔を出し、そそくさと穴の奥へ逃げもどる年とつたとかげ。この体制のなかでは家庭生活までが正常を欠く。あいつの前足はどこにでも突っこんでくる。

「わしは人さまの背のうしろに隠れるようなまねはせんぞ」私はまた口を切る。「わしの事務所でも、大多数が産別の旧組合に残っていたとき、わし一人がまっさきに『連帯』に入った、そしたら、上役、つまり所長からお小言さ。『あんたね、こういうことすると、本部の方からにらまれるよ』わしは、平気だ。そのままがんばつたさ」

「自慢にもならんよ」息子が応じる。「今となって、どこまでやりとげるか、それが肝要さ」

「やりとげる？」正直言つて腑に落ちかねた。「やりとげるとは、どういうことだ」

返事はなかつた。ただ食卓から立つと部屋の隅ずみをがさごそと探しはじめた。シユロの植木鉢をどける。じゆうたんをめくる。膝をついて、何やら穴からか、それとも別の隠し場所からか、とじこんだ紙を引っぱり出した。紙のしわを伸ばし、小声で読みはじめた。それは地下「連帯」のニュース。ビュレティンであつた。あちこちのストライキの経過が書かれていた。弾圧の実情。いかに活動家が網に追い込まれたか。そして呼びかけの文章も。幹部の一人は難をのがれて潜伏のまま活動をつづけている。

「こんなもの、うちに置いちゃいかん」こんどばかりは私も声を高めた。「即刻、持ち出すか、焼く

かしろ」私は手をのばした。息子はニュースをかかえこんでしまふ。私には手出しも許さない。これが日曜日のデイナーとは。神経にさわることはかりではないか。くつろぎたくてきたのだし、若わかしい生活に慰めを求めたくもあつた。ところが、ここで見たのは、坂をころがり落ちる二人の姿だ。似合いの夫婦。

見切りをつけようと肚を決めた。私は席を立つ。「おいしくいたいたよ」嫁に札を言った。「じやがいの団子なんぞ、お母さんの作るのとそっくりだし……話だけは通じ合わんがね」

二人はなんでもなげにうなづいた。

「父さん、送るよ」息子が言う。

だまっただまま私はその言葉を聞き流した。それでも息子は私について出た。

そのあとも沈黙が二人のあいだを支配した。言葉のむだだ。

通りに出てからやつと顔をあげ息子を見やった。そのとたんに度胆をぬかれた。ジャンパー(例のダウンジャケットを着ているのだが)、その胸にずらりとバッジを付けているではないか。ワレサが付けていたのと同じ聖母像。Solidearose、をほかにも。まだまだ。バッジのひとつひとつが目に焼きついた。あからさまに、これ見よがしに。息子は胸を張って言う。

「みんなが尻ごみしている今こそ、こうやって呼びかけてやらなくちゃ」

向う見ず！ 勇敢なやつ！ 豪傑！ 槍で戦車にいどむ。ただし、私は顔色を読みとらせはしなかつた。わざとあくびをして見せたほどである。こういう強情者に何を言おうと効きめはない。私には一つのことだけがわかつていた——大急ぎでうちへ戻りつくことだ。胸に並べた見せものが目にとまったら、不審訊問に決まっている。収容所行きにさえなりかねない。家宅捜査もやるだろう。そんなことは想像だにすたくなかつた……

そのとき、せいぜい百メートルほどの向うから巡視のくるのを見かけた——四人いる。私はくそ息子ともども、やつらを厄介ばらいしてやった——こうである。

「あつ、電車だ」そう叫ぶと、あわただしく息子の手をにぎつた。「じゃあ。またな！」

停車場に走りついてから、初めてあとをふりかえつた。息子は戻って行くところだつた。ありがたや！ 私はほつとした。肩の重みがおろした。ゆっくりと散歩の足どりで私はプラットホームを歩き出した。彼らは反対方向からやってきた。警察の男たちが。するどい目つき、その目でなめるように一人ひとりをにらみ回している。すると、ようやく利きはじめたウツオカのせい、それとも神経がゆるんだせい、それは分からぬが、私の中の悪魔が口を出した。

「やあ、お若いの」私は叫んでいた。

四人は足をとめた。こちらも。

「どうしましたか」一人が質問する。

「何も」私は答える。「ただ、思うんだがね——きつと、われわれは、この戦争を持ちこたえるだろうとね」

私は周りを取りかこまれる。

「だれが持ちこたえるだ」と類ひげの男が聞きかえす、その目が狼のように光った。

「何度も持ちこたえた民族だから」私は応じる。「わしにしたって、鍛えられている。二〇七二日も、今みたいに暮したが、なんとかへこたれなかつたものな」

「二〇七二」類ひげの男が聞きとがめた。

「ドイツ占領期間のことさ」

「そんな呼び方があるのか!」ひげの男が口をゆがめてにやりとした。「それがあんたの数学かね!」こうして私は二四時間のとめ置きをくらつた。そのうち一〇時間は地下室にとじこめられ、のこりの時間が通りの除雪作業だつた。ともかくも息子の難は、こうして避けてやれた。私といっしょだつたら、息子はまぢがなくなつてしまつただろう。

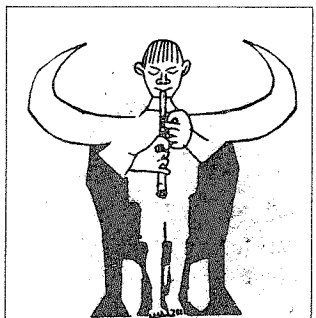
ノヴァコフスキのこと

戒厳令下にもめげずポーランドの地下出版はがんばりとおしている。「連帯」側にいわせると、その数は全国で数百種にのぼる。政府側の発表でさえ「連日、百種」と認めている。

「八〇年八月以前には戻らない」……救国軍事評議会のヤルゼルスキ將軍の公約は、皮肉まじりにいえば、文書戦の手をゆるめぬ「連帯」のおかげで実行されているのだ。

それらの文書は、ひそかに国外にまで持ち出されている。これを受けてパリでは「連帯ニュース」が一九八一年一月十九日に第一号を出し、いまは週刊の形で続刊中である。フランス語版もある。

「私は一步も後へ引かない」と拘禁命令書の写しを表紙に、その裏に走り書きしたワレサ委員長の手筆までそのままコピーしたのは同紙第六号（二月十五日付）だ。



水牛楽団のページ

十一月から十二月にかけて、いそがしかった。十一月二十二日、東京文化会館小ホールでは、あたらしい楽器編成ではじめてのコンサートで、プログラムにもフルートとピアノとかピアノソロとか、できることをすべてやった。客席にいたのは二百人あまり、水牛楽団としては切符も売らず、宣伝もしなかったから、いつもとはちがう顔の前で緊張して演奏し、きく方も緊張した感じだった。あたらしいアレンジは、曲ごとに楽器のくみあわせをかえてあるので、ひとりひとりの負担はかくなかった。トイピアノとチャランゴ、ピアノからはじめてはいり、ヤギの爪のガラガラがくわわる。亀田伊都子と八巻美恵は一曲ずつひとりずつうたう。

第十号（日付なし）には、マゾフシエ（首都圏）の「ブヤク、ヴロツワフのフラスイニエ」両連帯議長のインタビューが別々の「地元紙」から転載された。昨年五月の訪日代表団に加わった兩人とも、追及の手をのがれて潜行中の指導者である。さすがにしたたかなものだ。ブヤク議長の長文のインタビューは、もともとワルシャワ発行の「連帯」週刊マゾフシエ、第二号（二月二十二日付）に出た。細字のオフセット刷り六ヘーシ、たいていはタイプ打ちのビラのたぐいのなかで、群をぬく体裁、題字を赤で刷った凝りようである。

入手できたのは、この号のバリでのコピーだが、最終ページに見つけた小説ともスケッチともつかぬ極小の文芸作品「パスのなかで」を、ここに紹介する。この作品が訳出されるのは、世界でも本紙上が初めてであろう。

作者マレク・ノヴァコフスキは一九三五年三月二日生まれ、社会の脱落者、ひねくれ者、気まま者を好んで描く反逆の中堅作家だ。その点では「雲の中の第一歩」（角川版）で知られるマレク・フワスコ（一九三四—一九六九）と気脈を通じている。同様に暗いテーマをめぐる同じ作者の短編「死んだ亀」は「文芸」（七九年九月号）に掲載された。飼っていた

十一月二十六日に福岡にいき、RKB毎日TVの「おはよう、十時です」に出演（テレビははじめてだった、その日、九州芸術工科大学の学生たちの主催する「同時代音楽に何ができるか」フェスティバル第二日に東京文化会館とおなじプログラムでコンサート。二回目なのですこしなれたかな。おわってから元メンバー片田江智子の仲間たちと交流会をし、福山敦夫は「のんき楽団」の人たちと歌合戦をする。

十二月二日、水道橋で山谷越冬の映画会に出演。五曲うたう。

十二月六日、水木陽子コンサート「暗い日曜日」一九三〇年代の世界の歌。高田みどり、堤政雄と全二〇曲の伴奏をする。

十二月九日、武道館で「教科書問題を考える音楽と文化の集い」。アンプを通した水牛楽団はぜんぜんしょぼくれているが、というはなしだが、やっている方はやたらに大きな音でよくわからなかった。最後は日本フィドルとむきあった位置で、ベートーヴェンの第九のコーラスをうたう。

十二月十日、茶房ナームで「どぶろくコンサート」。「どぶろくつくりの歌」や「人間の努力は長つづきしない」など。司会の田川律

亀をこっそり公園の片すみに葬った主人公が動物愛護協会に追及される話である。

流産に終わった「連帯」革命に至るまでの「抵抗するポーランド文学」は、さきごろ「新日本文学」（三月号）で特集されたが、軍政を「占領」とあざけり、十二月十三日以前を「戦前」と呼ぶポーランド市民のあいだに新たな抵抗の文学が興りつつある……この幸福小説は、その先駆の一つであろう。

作品に解説を加えるまでもないが、パスの車内の人びとの無言の抵抗のかけにあるワルシャワの長い歴史の重み、対敵協力者（この用語も復活）へ向ける憎しみの深さ……を感じとってほしい。日本の戦時中、ヤミ米取り締まりの汽車のなかでかばい合う空腹の人たちを思い出す読者もあらうか。

（以上「説実新聞」より転載）

十二月二日という書き方は、七十年代末に出版されながらほとんど禁書あつかいにされた、占領時代をテーマとするバルトシエフスキ著「ワルシャワの十二月三日」という名の表題と無関係だとは思えない。ノヴァコフスキの短編のかずかずは、この春、戦時状態についての報告」と題する単行本にまとめられ、パリで出版された。（工藤幸雄）

「性の魔力の歌」と「のみやのヒーロー」（これはヒロノミヤの生活をうたった歌）をうたい、あたたくくむかえられる。三里塚から前田俊彦がゲストで、どぶろく密造共犯者のちかにもあらたに、五カ所で作った合計一斗以上のどぶろくをみんなでのんでしまった。黒板に居酒屋のメニューのようにかいたレパートリーを次つぎにうたい、しだいに舌がまわらなくなっておわり。

冬休みにはいった。年があけても当分は休み。予定としては、二月十二日のNHKラジオ「くらしのカレンダー」と、三月四日「国をかんがえ歌をかんがえるコンサート」があるだけ。たぶん三月には松本へいくし、五月にはカラワン楽団をよんで全国をまわる計画もあるが、まだまっぴらでない。

やはり自主コンサートを三カ月に一度ほどのペースでやった方がいいかもしれない。それも五百人のホールよりは、百人のすぐ近くで、さまざまな歌、とらえどころのない音楽をくりひろげる、あまりかたちのきまらないものでありたい。だが、そういうことを人はおもしろがるだろうか。相談してみないと、なんともいえない。つづきは次号で。

高橋 悠治

カラワン楽団はよみがえる

八巻美恵

モンコン・ウトック

「人と水牛」の歌をわたしはじめて聞いたのは……と、「カラワン回想録」とおなじ書き出しではじめようとおもいついたのはよかつたが、ウイラサク・ストンシーのように、この歌との劇的な出会いは、わたしにはなかつた。でも、この歌とはもう長い付き合いだ。一九七六年十月六日のクーデターのと、ひそかにタイから日本にはこぼれた「生きるための歌」のカセットも聞いたことがあるし、そのころは、タイの留学生との交流も

まだあって、「人と水牛」をふくむいくつかの歌の歌詞を彼らがタイ語から英語に訳し、高橋悠治がそれを日本語に訳すという時間がかかる協同作業もみている。水牛楽団がでる前に、この歌はすでに何度かうたわれていたが、うたっていたのはそのころも福山敦夫だった。楽器はシンセイザイやギター、ドラムセットがつかわれていた。

おもえば「カラワン回想録」にくわしいように、彼らが森へ入り、そのなかでカラワン楽団としてはだんだんバラバラになってゆくのと、水牛楽団が、楽団としてまとまってきた時期とはかさなっていたのだ。

水牛楽団がいまのメンバーにおちついて、プロの楽団としてやってゆく決意をかため、

呼ばれたわけでもないのにタイへでかけ、タマサート大学の庭で日本語の「人と水牛」をうたっていたころ、カラワンのメンバーのうちウイラサク・ストンシーとモンコン・ウトックはすでに森を出てバンコクにいたのだった。

そのときバンコクであった人たちは、みんな「カラワンならよく知ってるよ」というのである。なかには「カラワン？ ああ、きょうあつたけど、きょうはもうどこににいるのかわからない」という人もいて、わたしたちはもしかしたらあえるかもしれないと、期待に胸をはずませた。

結局そのときはカラワンのだれともあうことはできなかったが、「読書世界」の編集室

をたずねて、編集長のスチヤート・サワツシーにはじめてあい、「カラワン回想録」の第二部が掲載されている「読書世界」の最新号をもらった。短剣のようなものでさされた白いハトが血を流しながら落ちてゆく絵のついた表紙で、その白いハトの頭の下に「解放区でのカラワン」と印刷されている。

日本に帰ってから「カラワン回想録」を水牛通信にのせることにきめた。また、それを書いたウイラサク・ストンシーには予定されていた水牛楽団のコンサートのゲストにぜひ来てもらおうと、どこににいるのかわからない、まだ見ぬ彼にあてて手紙を託した。

するとふしぎにもすぐ返事がきた。「わたしはギターはひくが歌手ではないので、ひとりで行ってもしかたがない。ここにもうひとりモンコン・ウトックがいて、彼はピンをひき、歌もうたう。ふたりで行くのはどうだろう」

残念ながら水牛楽団にはふたりに来てもらうだけの財力がなかった。それでモンコンがひとりであることになったのだ。カラワンを呼びたいね、といいはじめてからここまでくるには、ずいぶん時がたっていたので、「行く」という返事をもたらしたときはほんとうに

うれしかったものだ。

しかし、モンコンとはどういう人なのか？ピンをひき、歌をうたう。これがそのときわかつていた彼に關することのすべてだ。「カラワン回想録」を訳している最中だった莊司和子から刻々情報ははいるものの、「たいへんよ、モンコンは義足なんだって」とか「なんだかすぐ気絶する人みたいよ」とかいうものばかりで、きくたびにびっくりする。ひとりて東京へやってくる方も不安だったにちがいないが、その人をまっけている方もまけないぐらい不安だったのだ。

ついにバンコクからテレックスがはいった。モンコンは飛行機にのつたという。二月二十日、彼がついた日の夜、水牛楽団と水牛通信の何人かで彼の歓迎会をひらいた。それぞれ緊張してかたくなっている。しかしこの日を境にして、それまでの不安や心配はみるみるとけてゆくこととなった。

もしもわたしたちにもつとお金があれば、たぶんモンコンのためにホテルの部屋をとることぐらいはしただろう。それができなくてよかつたのだ。モンコンはせまい家の中でわたしたちといっしょに生活することをたのしんだ。それでもときどき心配になって、ひと

りになって休みたくないかときくと、中国にいたときは軟禁状態ではんとうにひとりぼっちだったから、ひとりになるのはもうたくさん、みんなといっしょにいるほうがいいんだという。また、日本にいるあいだは水牛楽団のひとりだから水牛楽団といっしょに行動するよ、ともいつてモンコンひとりをよびたがった集会へは行こうとしなかった。

モンコンのいた三ヶ月間は水牛楽団は六人になったわけだ。この三ヶ月間は演奏する機会にもめぐまれていた。水牛コンサート「バンコクの大正琴」、日音協の音楽祭、「境界線上のメッセージ」、土本典昭監督の映画「こんにはアセアン」の音楽、「国をかんがえ歌をかんがえるコンサート」、中野の喫茶店みなどでのコンサート、渋谷ヤマハ、宇都宮の飯面館、名古屋民衆ひろば、三里塚労働舎宿所、新宿反核コンサート、フランス・ラルザックの農民を迎える集會、そして水牛コンサート「光州5月」など。そうだ、その間に「モンコンと水牛楽団」のカセット録音もした。

こうして日本でわたしたちといっしょにカラワンの歌をうたっているほどに、モンコンのカラワン再結成へのおもいは強くなっていたのだ。日本にくる前に、彼とウイラ

サク、それにポンテープ・グラントチャムナンの三人で再結成をこころみだが、うまくいかなかった。ポンテープはそのご、ひとりだけちがう道をあゆみはじめたという。

モンコンはウイラサクと手紙のやりとりをして、いまはふたりしかいないんだから、とにかくふたりでもういちど歌をうたってあることにきめたよ、といていた。ふたりなら物事をきめるのも移動するのもかんたんでいいんだ。いなかをまわってみたい。

モンコンがタイに帰るときにはいつしよにくっついて行ってみたいねと水牛楽団は全員いつていたが、亀田伊都子とわたしとはほんとうに行くことに決めてしまった。なぜそうなったかは今となってはなぞだ。理由があったとすれば、モンコンやカラワンがそだったタイの東北地方に行ってみたかったこと、わたしたちには行く時間があったということだ。男たちはいそがしくて十日間あけることができなかった。

さて、いつしよにタイに行くよという、モンコンはとびあがって（じっさいそのとき彼は十センチほどとびあがった）よろこんだウソじやないね、ほんとだね、それじゃ家に手紙を書こう。

つしよに興奮し、コンサートはいつ？ と口々にきくが、それが書いてない。どこかぬけている人たちだ。コンサートのくわしいことはわからないまま、それでもタイに行けばカラワンのメンバー全員に会うことはできるらしい。

日本についたときはピンと着がえのカバンひとつだったモンコンの荷物は、三カ月の間にずいぶんふえていた。自分で買ったのと窪田聡にもらったのとでチャランゴが二本、サンポーニヤなどの楽器類、着るものがいっぱい（彼はおしやれなのだ）チリの「新しい歌」やポーランドの「禁じられた歌」、喜納昌吉や坂本龍一などをコピーしたカセットテープがごっそり。タイで売るために録音した「モンコンと水牛楽団」のマスターテープ。タイ語で書かれた日本語の教科書。いろんな人からもらったおみやげの山。ひとりだったらどうするつもりだったのだろう。タイの税関を通るときのかんがえて、マスターテープはわたしが持った。なにしろタイでは今だに禁止されている「人と水牛」が堂々と最初に録音されているテープだ。



スラチャイとウイラサク

タイに行ったり、タイから人をよんだりするとき気にかかることのひとつにことばの問題があった。タイでは英語はあまり有効でない。英語を話す人はかぎられているし、なにより、英語ではなすことは歓迎されないという感じがある。

モンコンは教師がきらいで英語をきちんと勉強しなかったとかいって、あくまでタイ語しかはなさない。こういうこともあろうかとすこしタイ語を勉強してはいたが、まるで役にたたない。身ぶり手ぶりと言のタイ語でやつとはなしに通じる。タイ語の教科書を片時も手ばなすことができない。しかし、彼のはなすことをわかりたいとおもい、こちらにも伝えたいことがあれば、わたしのように怠惰な人間でも知らぬ間にきたえられる。ある日、タイ語の教科書をわすれてかけてもこまらなかつたことに気づき、三カ月たつころにはモンコンのはなすことだけはわかるようになった。五月なかばのタイは夏のさかりであつた。

ミエさんとイツコさんという女の子がふたり、ぱくといっしよに帰ります。

彼女たちがくるのを歓迎します。六月のはじめにはおまつりがあるから、それまでではどうですか。ところで彼女たちはいくつなのか？ 結婚しているのかいないのか？

一週間の予定で日本に行つたのに三カ月もいて、女をふたりつれてくるなんて……という心配がありありと伝わる手紙でおかしかった。

それから少ししてもう一通の手紙がモンコンにとどいた。カラワンのリーダー、スラチャイ・ジャンテイマトンが森から帰ってきたことを知らせた、スラチャイの妹からのものだ。この手紙をよんだときも、モンコンはやっぱりとびあがった。ゆうべはスラチャイが帰ってきた夢をみた、といったことが一度ならずあつたくらいだから、彼がいちばん待っていた知らせだ。

バンコクでは、リーダーをふたたび得て、カラワンの再発足はすぐ現実となつたらしかった。コンサートがひらかれることになつたからすぐ帰ってくるように、とウイラサクからも手紙がきた。わたしたちもモンコンとい

た。ことにバンコクはただならぬあつさに加えて車の排気ガスで、灰色の陽炎にすっぽりつまれている。空気は東京よりずっとわるい。エアコンのないタクシーにのって交通渋滞にまきこまれたりしたら、あつさと排気ガスとで息がつまりそうになる。

ついたその夜はホテルにとまり、二日目はモンコンといっしよにタマサク・ブンチャートの家にとめてもらった。彼は画家だ。たしか八〇年のアジア・アフリカ・ラテンアメリカ美術家会議の展覧会で、彼の絵が何点も展示されているのを見た。ほとんどがタイの社会の問題を剔出したこまかなペン画だった。タイの絵かきは貧乏で絵具を買えないからしかたがなくてペンでかくんだよ、といてタマサクはわらった。彼の家にかかつている中に、皮でつくつたなかばオブジェのようなものがある。カラワンという字がうまきでいるレコードのジャケネットにつかうつもりだったのが政変でダメになつたという。

あくる日、つまりタイについて二日目に、やつとウイラサクとスラチャイに会うことができた。彼らは電話をもっていない。口づてでモンコンが帰ってきたことを知り、探し、行き違つたりして、あうまてに三日間をつい

やしたのだった。

ワイラサクは、カラーのついたワイシャツに混紡のストラックスをはいている。タイ人としては太めで、そのせいか汗がきだ。口数はすくなく、ひかえめである。

ストラチャクはTシャツにジーンズ。やせている。口数はたいへんに多い。しゃべっているときは貧乏ゆすりの絶え間がない。繊細さと野望とが同居している。「この人の目は連帯性のない目なの」とだれかがささやく。ときどき斜視になることをこういうらしい。

この日はカラワン自身の再会と、カラワンと水牛(の半分)との出会いがかさなっており、記念すべき長い一日となった。

夕方、東北地方(イサーンとよばれる)のおいしいごはんをたべた。蒸したもち米が竹で編んだきれいなカゴに入ってきてくる。それを片手でギョッとにぎって、おかずをつけてたべる。スチャート・サワッシーやセーニー・モンコンもいっしょだ。セーニーは「カラワン回想録」にもあるように、カラワンのマネージャーだった人で、今は通信社ではたっている。

「カラワンとあってどう？」と彼がきく。

「ウーン、日本に伝えられている情報から想

像していたのは、カラワンは芸術家であり、尖锐なコミュニストであり、それにきつと気むずかしい人たちなんだろうということ。でも会ってみて、ちょっとちがうなあとおもっているの」

ストラチャイがこういった。「ぼくは芸術家として詩をかいたり、歌をうたったりするけど、コミュニストじゃないよ。むしろアナキストといったほうがいい。コミュニストというのはタイの政府がきめたことで、それ以外のちまでもねらわれるんだ。今だってひとり道のあるいているときにねらわれて殺されたら、それっきりさ。だからいつもコワイという気持があるよ」

実際10・6直前のバンコクで、夜の町を歩いているときに尾行され、ねらわれたことがあった。夢中で逃げただけあのとときはコワかったと、そのとき彼といっしょだった友だちがいつていた。

まわりの食堂はもう戸じまりをしているのにわたしたちのテーブルだけにぎやかにしゃべっている。メコンウイスキーをいったい何本あげたことだろう。あつくてアルコールがすぐ発散してしまうのか、いくら飲んでも酔わない。「あんだたちはつよいねえ、男とお

んなじだよ」と食堂のおばさんにはめられたのか、あきれられたのか。男といっしょになつてお酒をガンガンのむ女というのは、あまりよいイメージではないらしい。

町は人通りも絶えた。真夜中近いのだろう。つきにつれていかれたのは、男、とくに日本人や白人の男がタイの女を物色するための店だった。外の静けさとはうってかわって人間がひしめきあい、音楽がなっている。人をかきわけ、いちばんすみのテーブルにやっつと席をとり、あたりをみまわす。ストラチャイが、ちいさな声で「これがタイだ、よく見ておきなよ」という。広くもない店内に五十人以上の女がいる。みんなきれいに化粧し、ドレスアップしている。お客で女というのはわたしたちふたりだけだ。男は白人が二十人もいただろうか。アメリカ人とおぼしき大柄なふつつた若い男がわたしたちのそばをウロウロしている。ワイラサクがその男をにらんで

「このデブ野郎」とタイ語でどなっている。

自分だつてふとっているのに。「ここはイサーン出身の、それも三十すぎてる女の人が多いんだ。ストラチャイはあたらしい小説を書くんで、ここではたっている女の人にはなしをきくために来たんだよ。彼は



こういうとこへ来ては平気だけど、ぼくはぼくはずかしくてダメなんだよね」とモンコン。

ストラチャイは壁ぎわでひとりの女の人はなしこんでいたが、しばらくして彼女をつれてもどってきた。

「このひとは偶然ばくと同じスリンの生まれで、生まれた年も同じだった。自分と同じような育ちかたをした女の人が、今バンコクに出てきてこんなことをしなければカネをかせぐことができないんだよ。はじめて彼女とはなしてそれを知ったときはかなしかつた」

「はずかしいんだけど、お金をかせぐためにこういう仕事をしているの。生きていくためにはお金がいるでしょう。ふたりともしあわせそうにみえるわ。それにきれいな」と彼女がいう。わたしたちはなんとこたえていいかわからない。

男たちは今夜彼女を買おうかと相談している。とにかく買うといってお金をはらってしまえば今夜だけは彼女を自由にしてくれるんじゃないか。でも彼女はよろこばないかもしれない。議論の結果そのまま帰ることになった。帰ったところはストラチャイがバンコクでの宿舎としていた部屋だった。女性誌の編集室が一階、二階、三階とあり、四階に彼のねる

モンコンの家は、あたりではいちばんりつはにみえた。カラワンは全員イサーンの中産・知識階級の出身なのである。学生バンドとして出発した彼らも、今ではいちばん年下のモンコンが三十一歳、年上のストラチャイは三十四歳になった。ストラチャイとウイラサクは、もうトシだから作家にでもなろうか、といっていた。

このパノムプライは、町の中央に市場があり、それをとりかこむように、ちよつとした商店街、映画館、ローイエト行バスの停車場、学校などがある。町としては小さいほうだろう。若い男の人はほとんどみかけない。ここにいってもすることがなく、都会へ出稼ぎに行ってしまった結果だ。女たちは大きなまなこ竹ザルにそれぞれ自慢の蚤をかい、簡単な織機であざやかな色の絹の布を織る。夕方、外にゴザを敷いてごはんを食べはじめると、近所のおじさんやおばさんがやってきてはしゃべって行く。夜は深く、星が流れる。電気はあるが水道もガスもない。町を一步でると白くかわいた大地がはてしなくひろがる。たがやす人はなく、みのっているものもない。「これがタイだ、よく見ておきなよ」とまたストラチャイがいう。

場所がある。家財道具はマットレスと小さな机、それにビールのあきびんとギターだけ。部屋の主はすこし酔って、ヨーン、今夜はふたりのために歌をうたうぞ、といってギターをとりだした。そのギターは彼が森にいと

きかずと持っていたものだ。フレットは弦ですりへって、もういい音はでなくなってしまうたけれど大切なんだ、といってやさしくだいている。弦をとめてあるピンは、森で歯ぶらしの柄で修理したもので、赤や黄色のプラスチックだ。「人と水牛」をひきはじめる。右手、つまり弦をはじくほうの手は親指と人差し指の二本だけでひいている。次にこの曲のとはボブ・ディランだよ、と「戦争の親玉」のはじめのほうをひく。つくった本人がそういうから、なるほど、そういうわけば似ている部分もあるとおもうけれど、これはまったくちがう二つの歌だ。それから映画「トンパン」の曲をひく。この映画の音楽は彼のつくったものだ。カラワンが一時分裂してストラチャイがひとりではなれていたときにくられたときいている。

翌日はローイエト県、パノムプライにあるモンコンの家にむかって長距離バスにのる。カラワンのコンサートは六月十九日、タマ

それはたしかに貧しいくらした。けれど、この貧しさにつつまれてみると、豊かだともっているわたしたちのほうか実はずっと貧相だということがよくわかる。カラワンのみんながいうとおりだ。イサーンは貧しい。だけどほんといいていところだ。ここにはなんにもないけど、なんにもない。バンコクにはなんでもあるけど、なんにもない。

あついでいことにかわりはないが、空気がうごいているのが感じられて気持ちがいい。とつぜん冷気をふくんだ風が吹くと、雷がなつてはげしいスコールがくる。雨があがると、すずしくて生きかえつたような気がする。

ある日、トラックののってケーンを買いにいった。ケーンは竹製の笙に似たイサーンの楽器だ。買いにいくといつても楽器屋があるわけではない。ケーンを作っている人を知らないかと村から村へとたずねあるるのである。半日をついやしてやつとみつけたケーン作りの人からケーンを二本買ったカラワンは、一本を水牛楽団にくれた。ケーンはともむずかしい楽器で、水牛楽団はもちろんカラワンもまだつかいこなすことはできないようだ。パノムプライでの最後の日は夕映えがきれいだった。そのなかを散歩する。あるきなが

サート大学講堂でひらかれることがきまっていた。主催はユニセフ。「かえつてきたカラワン」と、新聞や雑誌にとりあげられている。練習をかねてストラチャイとウイラサクも同行することになった。森からもどつて一カ月にしかならないストラチャイは、おくさんに電話してやつとおゆるしをもらった。

ギター、ピン、チャランゴをもってゆく。バスターミナルにトングララン・タナーが見送りに来た。大きな人だ。みんなより頭ひとつ大きい。とても無口な人で、彼の声をおもいだすことができないくらいだ。

バンコクからローイエトまで約四百五十キロを冷房つき長距離バスでゆき、そこからパノムプライまでは冷房のないバスにのりかえて六十キロくらいか？ 朝十時ごろバンコクをでて、モンコンの家についたときにはもうすつかりくらくらになっていた。

一応冷房がついてはいるが、なんといつてもバスは鉄の箱、直射日光にさらされてあついでい。外の景色がみたくても、あついで窓のカーテンをあけていことができない。着ているものはアツという間に汗まみれだ。「あついでいだろう、これがタイだよ」とストラチャイがいう。

らストラチャイがいう。「あしたのことはだれにもわからない。きょうみんなていっしよにいられることを大事にしよう」「あしたのことはわからないといついでいけど、あしたはバンコクに帰るんだろう」と現実的なモンコンはぶつぶついついでい。

会って間もないころは、外国人の友だちはいないけれど、基本的には外国や外国人は好きではないといついでいたストラチャイが、日本にだけは行つてみようかなといついでいはじめていた。ウイラサクは日本の食べものといついでいはじめた。心配している。モンコンの持つて帰つた写真をみて、チャランゴをくれた窪田聡の風貌が気に入つてしまひ、日本に行つたときは彼の家にともりたいといついでい。

出会いはうまいくついでいようだった。わたしたちが日本に帰る日、彼ら三人は空港まで送つてくれた。朝食を空港のレストランでとると、これがトリストにハム・エッグといついでい献立である。ふだんは朝から二人前ぐらいかんたんに食べる彼らも、このブックファーストはあまり喉を通らないらしい。見送つたあとで、ちゃんとしたごはんを食べなおそうといついでいあついでい。別れるときになつて、あらためて、わたし

たちはずいぶん遠くからおたがいのもとにや
ってきたのだとおもう。殺された彼らの友だ
ちや仲間のはなしをきけば、彼らが四人そろ
ってまた歌をうたえることのほうが不思議に
おもえたりもする。しかも生命の危険は完全
にさつたとはいえない。なにかがあるたびに
彼らはどうしているだろうかと、わたしは
はこの先ずっと気にすることになるだろう。
六月十九日のコンサートのテープはきつと
送るという約束だ。

カラワンふたたび

六月十九日、六年ぶりのコンサートはたい
へんな人気だったようだ。ユニセフ主催で、
いくつかのバンドや歌手が出演したが、きき
に来た人のほとんどはカラワンがめあてだっ
た。料金をふつうのコンサートより高かった
ようだが、人があふれてプレミアムまでつ
いた。会場のタマサート大学の講堂の外には、
それでも入れなかつた人たちが立ってきい
たときく。

約束どおり送られてきたテープをみんなで

きく。あたたかく大きな声援にむかえられた
カラワンの最初の歌はやっぱり「人と水牛」。
「ひととはたがやす……」と（もちろんタイ語
でだが）うたうスラチャイの声は上気してい
る。森でバラバラになっているとき、スラチ
ヤイとモンコンが別々につくった、偶然おな
じ題の「菓にかえる」という歌がふたつ。彼
らの菓とはどこなのか。森でないことだけ
はたしかなようだ。

わたしたちがもっている、10・6以前に録

音されたカセット・テープに収められている
歌とは感じがすっかりかわってしまった。た
たかいたともにあつた歌のいきおい、カラワ
ンそのものの若さはなくなつてしまつたよう
だ。六年の歳月と森での生活が彼らをそんな
ふうにかえてしまつたのか。

タイの九月は雨の季節。日本の梅雨のよう
に一日中雨がふりつづく。
モンコンから、コーラートで待っている
という手紙をもらっていたので、またもヤン
コクから長距離バスにのる。

雨期はまた農繁期でもあるようである。人も水
牛も牛も田んぼではたらいっているのがみえる。
苗代にうわっている稲の苗はずいぶん丈がた
かい。気温は高いし雨はふるし、きつとグ
ン育つてしまうのだろう。

コーラートはバンコクから約二百六十キロ、
バスで三時間半ぐらい。日帰りでわたしは
を送つてくれたのはスマナー・ナナコンだ。
彼女はバンコクに「メット・サイ（砂つぶ）」
という名の店をもっている。一階は本、衣類、
小物などが置いてあるギフト・ショップ（と
彼女たちは称している）にコーヒー・ショ
ップ、二階が事務所兼編集室で、子ども向けの
本をつくっている。七六年のクーデター以来
は左翼系の本もつくつていたが、弾圧をうけ
た。今はもつとしなやかなやりかたをしてい
る。タイにはこどもの本の市場はまだないの
だそう。こどもはお金をもつてないから、
日本の絵本のようにいくらかきれても高く
は買う人がいないのよ、というわけで彼女が

つくっているのは一冊五バーツ（約五十円）
の、おとなの手のひらぐらいのちいさなうす
い絵本だ。おはなしあり、学習もあり、ク
イズあり。日本の絵本の翻訳もある。

この店を彼女はいっしょにくらしている男
の人とふたりで経営している。スラチャイの
妹もここで働いている。

知りあつたのはおたがいにカラワンの友だ
ちとしてだったが、仕入れのためときどき日
本にやってくるスマナーとは会う機会が多く、
カラワンはそつちのけで、女同志結婚制度に
対する疑問などをはなしあえる仲になつてし
まった。大きな目をクルクルうごかしなが
ら早口でしゃべるので、彼女のいうことがわか
らないこともあるけれど、そんなことはたい
した問題ではない。彼女と知りあえたのは幸
運だった。カラワンだけでは片手落ちだ。彼
女のようなひとに会わせてくれたカラワンに
はやはり感謝しよう。

そのカラワンがなぜコーラートにいるのか
といえ、前の晩ここで彼らのコンサートが
あつたからだ。しかしコーラートにいるのは
わかつているが、広い町のどこにいては
わたしたちはもちろんスマナーもしらない。
コンサートをやる町にはかならず連絡場所が

ところでこのコンサートの実況録音カセッ
ト・テープはEMI（東芝）がカラワンから
権利を買って発売している。EMIは東南ア
ジアのカセット・テープ市場における独占企
業なのだそう。他の国はしらないが、タイ
では「生きるための歌」に限らず、ほとん
どの音楽はカセット・テープで、レコードはあ
まりみかけない。カセットは一本が六十バー
ツ（約六百円）内外。日本では無地のテー
プ一本の値段だ。

EMIからもらつたお金で楽器などを買い
そろえ、新生カラワンはまたタイの国中をキ
ャラバンしはじめた。

五月にカラワンのコンサートが見られな
かつたのが残念で、わたしはもう一度タイ
まで行つてみることにした。九月にまた行く
という男たちはいい顔をしな。だけど彼
らだつて、行くのがもしわたしたちでなけれ
ば、よその男たちがわたしたちにいったよう
に、「まわりはいろいろいうだろうけど、行
きたいんだつたらおもしろいって行つたほう
がいいよ」なんてニコニコしているにちがいな
い。その程度の理解はあることを信じて、さ
ざまな軋轢にもめげずおもいきつたのだが……。

あつて、コーラートでは大きな衣料品ス
トアがそれだった。まずそこをたずね、カラ
ワンはトキーヨーホテルにとまつて、と
しえられた。はるばるトキーヨーからや
ってきたのに、ここでもまたトキーヨーか。

ホテルにはスラチャイとモンコンがいた。
コーラートでのコンサートの前は、十四日
南タイをまわつていたのでそう。モンコン
は疲労でついにコンサートのあと倒れ、ゆ
べはホテルのとなりの病院にかつぎこまれて
そこで寝ていたといつて注射のあとでかた
なつた腕をみせてくれる。

コンサート活動を再開して三カ月たらず
の間に、彼らは行くさきさきでたくさん人の
声援にむかえられ、すっかり自信をとりもど
しているようにみえた。はれやかな顔つきに
なつた彼らを見てなんだかホッとす。

モンコンが通つていた東北技術専門学校は
ここコーラートにあるので、彼にとつては地
元、友だちがたくさんいる。毎日友だちの家
をたずねては森のことや日本のことを話して
ほとんどねるヒマがないほどだ。

雨は毎日ふついている。
コーラートからすこし南にさがつたところ
にコーンプリーというちいさな町があり、そ

こに住む友だちの家にいった。材木の産地であるこの家にも、縁台を大きくがっしりしたような木製のベンチがある。床もりっぱな木だ。何という名の木かはきかなかつたが、このあたりでまでヤマハの触手はのびているそうだ。タイ人が自分で使う家具をつくる木で日本人はギターをつくって売る。

この町はもうカンボジアの国境に近い。車にのってもう少し国境にむかって走れば、森だ。ちょっとあぶないかもしれないけれど、その近くまで行って一晩とまってみようという予定だったのに、ふりつづく雨に断念せざるをえなかった。

さて、わたしたちのみたカラワンのコンサートは九月十一日、ブリラムでのものだ。ブリラムはコンサートから百キロほど東、ここもイサーンだからカラワンにとっては地元でのコンサートといえるわけである。

コンサートからは鉄道でも行ける。鉄道は時間がかかるし、今はバスのほうが便利になってきているけれど、のってみるとおもしろいし、タイがわかるよとストラチャイはいうが雨で線路が氷びたしとまってしまっている。仕方がないのでタクシーで行く。ブリラムの町の入口にコンサートの大きな看板がでてい

る。わざわざタクシーにとまってもらい、しばらくながめる。

この町での連絡場所はちいさな本屋だった。この前きたとき（というのほもちろんクレーター以前のことだ）も、そうだ、ここだったよ、とモンコンはおもいだしたようすだ。とまるのはグラントホテル、コンサート会場はそのとなりのグラントシアターだとわかる。朝七時半、ねむりはいつも宣伝カーのパカでかい音でやぶられる。コンサートや映画、それにバーゲンセールなどの催しもの一切を町中に宣伝している。それも三回ぐらいまわっている。十一日のお知らせはカラワンのコンサートだけだった。

この日は土曜日のためか、二時と七時の二回公演である。主催はジュニア・ジャンポリ。ふだんは映画がかかっているらしいグラントシアターに一時すぎに行くと、入口の周辺は自転車やバイク、屋台の出店などで雑然としている。人びとはそれらのあいだを悠然とぬってあるいている。

わたしたちは「カラワン御一行様」としてもてなされ、どうぞどこでもすきなところにすわってください、といわれた。劇場は千人近く入るような大きさだ。中央の通路の真中

あたりがミキサの位置なので、そのすこしうしろに腰をおろす。こういう劇場にPA装置が完備していることはまずない。カラワンは自分たちでPA装置一式をもちあわしている。機材を運んだり操作する「カラワンボーイ」と呼ばれている少年が二人、そのためについていっしょにある。彼らのもっているPAは「エンタテイナー」とかいうのはじめて大きくブランドのアメリカ製。EMIにカセットの権利を売って、そのお金で買ったというのはコレか。

舞台ではすでに胡弓、タイコ、歌にあわせておどりをおどっている。男と女のかけあいみたいなおどりもある。この土地のもののようにだ。入口で手渡されたいやに上等な感じのチラシをよくみると、ソニーのオーディオ製品のカタログだった。舞台のおどりやそれを見ている人たちと、まったく場ちがいない日本。

プログラムは、おどりのあとカラワンがまざワン・ステージ、約四十分。次にポーン・ミュージック。これはチェンマイの人で、自分の上半身、頭や顔や胸などの骨を指でたたいて、よく知られた歌のメロディーをつくる。この人とは水牛楽団がチェンマイに行ったとき共演したことがあって、再会をよろこびあ



った。それから三人の漫才がある。漫才のかわりに主催者からのプレゼントコーナーがあって、チケットの番号でジャヤや扇風機、大型冷蔵庫などがある。これが目的で来た人が多く、おわたたら半分近い人がゾロゾロ帰ってしまった。お客が減ったところへカラワンがでてきてもうワン・ステージ。間に食事時間をはさんで、これをまるまる二回やる。二回目がおわたしたのは十二時近かった。

さて、カラワンのステージである。彼らは舞台におもいおもいにあらわれ、マイクテストからはじめる。あんなこと前にやっておけばいいのに、とおもうのは日本人の感覚だが舞台裏にあたるようなことは見てみるとなかなかおもしろいものだ。

むかって左がトングライン。彼はバイオリン、ギター、タイコをもちかえる。そのとなりがモンコン。ピン、歌、タイコとシークをすこし。次がストラチャイ。歌とギターのいちばん右にウイラサク、ギター。

はじめりの歌は、例によって「人と水牛」だ。前奏がおわって歌になるとドツと拍手がくる。なるほど、みんなが知っている歌なんだ。歌のあいだにしゃべるのはストラチャイとモンコンで、両端の二人はひと声も発しない。き

きたい曲やききたいことがあったら手紙をください、と何度もいつている。つまりリクエストカードだ。要望の多いのは「アメリカン・アンタライイ（危険なアメリカ人）」だが、この曲は演奏されなかった。

人と水牛、コメのうた、ジット・フミサク、立ってたたかえ、葉にかえる、黄色い鳥、カラワン……と今おもいだせる曲はこのくらいだ。ストラチャイがメンバーの名前と生まれた土地を紹介する。

ストラチャイのびやかな声。ウイラサクはときどき客席に背をむけてギターをひいている。左ききのトングラインはなぜか右手でひいている。かんがえてみるとモンコンがうたうのを見るのはじめてのことだ。日本ではいつもならんで演奏していたから、みるチャンスがなかった。

カラワンの歌の魅力をことばであらわすのはむずかしい。水牛楽団のことを棚にあげていえば、カラワンはとりたててうまいバンドとはいえないとおもう。けれど彼らがうたうのを見ると、めぐりあいたかったのはこういう歌だったんだと納得できる、そういう何かがあるのだ。その何かこそ歌にあるのであって、いくらことばをかさねてもあらわせない

ものだ。ききながら、昔ストラチャイが新聞記者をしていたときの名刺に印刷していたということばをおもいだしていた。ストラチャイ・ジャンテイマトン、自由思想の輩……。カラワンそのものや彼らの歌は、わたしたちの何気なく知っている歌や音楽にだけでなく、生きかたにまで別の照明をあててくれるものだ。東京に帰ってきてから、銀座の食事で偶然タイ人の観光旅行団となりあわせた。初老のお金持ちばかりだ。わたしがタイ製の袋をさげていたのではなしかけられた。日本人なのにタイ語ができるなんて、タイに恋人がいるんだらう、などとしゃべっているうちは問題なかったが、カラワンの話をするとうちは座がシラけ、なかでもいちばん身なりのよい太ったおじさんが、「ああいうものはコードモのやることだ」と苦々しそうにいった。

無事コンサートがおわると、ストラチャイが申しわけのようにいうのである。「きょうは疲れていてあまりよくなかった。それにこういういなかでやるのとバンコクでやるのとはぜんぜんちがうんだよ。」でもわたしたちは満足だった。

翌日ロイトエトで予定されていたコンサート

トは主催者の都合でキャンセルになったという知らせがきていた。仕事はおわりだ。さあ飲むもう！

地方のコンサートの場合、はじめに企画するのはたいして学生のようだ。一カ所やることとがきまると、口づてで自分の所でもやりたという人があらわれて、どんどんふえてゆく。来てほしいといわれれば、どこでも行く。南タイでも予定は十日間だったが、行ってみたら十四日間になってしまったということだ。長距離の移動は楽器とPA装置一式を全部もってバスでする。「カラワンボーイ」はどうしても必要なわけだ。

出演料など、お金はどういうふうになっていくのかきいてみればよかった。モンコンは高額紙幣をチラつかせて、「ほかのメンバーはみんな家族もちだから、家に渡さなくちゃならないけど、ぼくはひとりだからその必要はないからね」といって食事代などの支払いを一手にひきうけている。

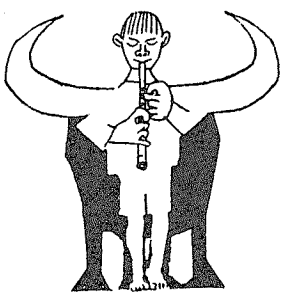
バンコクに帰ると、彼らが自ら「カラワンオフィス」と称する部屋をかりているのがわかった。彼らはふだんバンコクに住んでいない。活動を再開すればバンコクが中心になり、寝るための部屋がいる。彼らはうれしそうに

オフィスというけれど、外からは、どうしても車庫にしかみえない。なかに入っても、八畳ほどの部屋の奥にトイレがついているだけで、そこに楽器、衣類、ふとん、本などが雑然とおいてある。電話はもちろんない。壁にはカラワンの再結成を報じた毎日新聞のコピーがとめてある。広いところをかりると客ばかりきてうるさい。このくらしい部屋だといれどもとまれないから、かえって静かだといえそう。

カラワンのコンサートの録画がテレビで放映されることになったが、「人と水牛」とあたらしい歌「カラワン」の二曲はカットするとテレビ局がいうのでストラチャイは話し合いにでかけた。「情況はまだいいとはいえない、やつははまだあぶないんだ」とモンコンがおしえてくれる。

コーラートで、モンコンの同級生だったトックがいつていたことをおもいだす。また政府がかわって、もしカラワンが活動できなくなることもあったらそのときはあぶないわ。彼らはもう森に入ることもできないし、そうなったら日本へ逃げるしかないかもね。

タイが日本で、あるいはその両方で、カラ



ワンと水牛楽団の合同コンサートをやりたいということもすいぶん話題になった。カラワンと水牛楽団が実際にいっしょにできることはとてもかぎられているけれど、もし自分たちの力でそのコンサートがひらけたら、あたらしい歌やあたらしい物語がつけ加えられることだろう。

タガログ語と大日本帝国語

津野海太郎

一九四一年十二月二十三日未明、本間雅晴中将のひきいる六万五千の日本軍（南方派遣第十四軍）がルソン島北部のリンガエン湾に上陸。翌四二年一月二日には、マッカーサーの極東米軍によっていち早く見捨てられた「無防備都市」マニラを占領し、ただちに軍政府樹立を宣言した。そして二月十七日に布告された政令第二号によって、大東亜共同体理念にもとずきフィリピン人の民族意識をたかめ、初等教育や職業教育を強化するという趣旨の占領の基本方針が打ちだされた。そのなかに、英語とスペイン語をフィリピンから追放し、あらたにタガログ語と日本語を公用語にするという一項があった。

言語問題は占領行政のなかできわめて重要

なかで日本軍は生活のあらゆる面でのアメリカ化がすすむマニラの街を占領したのである。当然、おなじぎすみの眼はひそかに日本人にたいしてもむけられたはずだ。「英語もはやべれない野蛮人のくせに」というわけである。こうした視線を背中に感じて、日本人の屈折した感情はいやが上にもあおりたてられた。そのことが、アメリカ文化によって民族の魂をうばわれたフィリピン人の性根をたたきなおしてやろうという日本人たちの一方的な使命感を、いつそうつよめていったであろうことは想像にかたくない。

フィリピン人の民族意識を強化すべく、英語を追放しタガログ語を奨励する。それが日本軍による言語政策の基本的な柱ぐみだった。そして最終的には朝鮮人や台湾人にたいしてそうしてきたように、すべてのフィリピン人に日本語を押しつける。それがこの言語政策の底にかくされた日本人の本音だった。

主張の柱ぐみと内容とはまっぴらつにひき裂かれている。日本軍は片方の手でフィリピン人のナシヨナリズムを昂揚させるためにタガログ語を奨励し、と同時に、もう片方の手でさかさず日本語を押しつける。だが、いったん火のついてしまったナシヨナリズムは、

な位置をしめていた。実務上での困難を解決する必要があったということだけではない。アジアを欧米勢力の手から解放し、日本を中心とする大東亜共栄圏に再編成するという公式の戦争目的にたらしめてみると、言語問題はそのままイデオロギー問題でもあった。しかも、そこに欧米的なものにたいする日本人の屈折した感情がからみつく。これはフィリピンではないが、一九四二年十二月、戦地慰問団の一員としてシンガポールを訪れた徳川夢声が、盛り場の映画館で、ミックキー・ルーニー主演の『初解風情』というアメリカ映画を見たときの話がおもしろい。かつての活弁王は特等席の藤椅子にどっかと腰をおろすが、どうにも居心地がわるいのである。

当然、英語だけではなく日本語の押しつけも拒むことになるだろう。その場合、日本人の側はどうすればいいのか。一九四二年から四三年にかけて、軍報道部の一員としてマニラに滞在した哲学者の三木清がまっさきに直面したのもこの問題だった。せっぱつまったかれは、大東亜共栄圏における日本語は「西洋中世のラテン語」と同格同質の公用語なのだという理論をあみだした。この理論をはじめかれは一九四一年におとすれた満州で思いついた。もともとそこかれはこの「日本語＝ラテン語」説によって、日本語を知識人用の高級な「学者語」としてあつかい、日常のコミュニケーションのためには、むしろ日本人のほうが積極的に満語（北京官語）をまなぶべきだと主張していたのである。ところが二年後のフィリピンではかれの主張はさらに急進的なものになっていた。

ともかくも日本語の急速な普及が必要である。それは何よりも軍政の浸透のために必要である。それは大東亜共栄圏の共通語を確立するために必要である。……日本語の大衆化と共に土語が問題になってくる。フィリピンの国語問題は別にしても、その

「最先方に三等客がいるが、これが英語の台辞でゲラゲラ笑ってる。私にはこの英語解らず、どうも彼等の方が文化人みたいな気がした」（『夢声戦争日記』）。

この感じはよく理解できる。夢声のみならず、シンガポールのみならずである。アメリカ植民地時代のフィリピンでは、すべての公教育は英語によっておこなわれていた。そのため、とくにアメリカ支配の定着した一九三〇年代にはいると、上層階級の知識人たちは英語で読み書きすることが日常の習慣になり、タガログ語やビサヤ語やセブ語やイロカノ語などの民族語しかしゃべれない一般大衆、あるいは民族語で書く大衆作家たちをあたまたから蔑視する傾向がたまっていた。そんな

土語を減してしまうことは不可能であろうし、またそれが我々の目的でもあり得ないであろう。そうであるとするれば、土語の中へ日本語を入れてゆくことを考えるべきではないかと思う。古典的なギリシア語やラテン語が現代ヨーロッパ諸国の言語の中に入っているのと同じような形で日本語が東亜共栄圏の諸言語の中に入れてゆくことを考えることができる。……少なくとも若干の重要な日本語の語彙は何とか翻訳されないでそのまま土語の中に入り、これと混合乃至融和するやうになることを考えて宜いと思う。（『比島の言語問題と日本語』）

フィリピン派遣第十四軍の報道部は、勝屋富茂中佐（のちに齋藤次郎大佐）を中心に、十数名の士官、三百名の下士官と兵隊、それに民間から徴用された百数十名の作家、新聞人、画家、書家、カメラマン、放送や印刷技術者などによって編成されていた。マニラ占領と同時に、その後の情宣活動の中核として、徴用作家の尾崎士郎、今日出海、石坂洋次郎などをあつめて部内に企画班を組織し、おくれややってきた三木清、火野葦平、上田広もこれにくわわった。ピラの作成や軍布告の案文

づくりにはじまって、新聞社や放送局の接収、青鉛筆をにぎっての検閲まで——今は映画や演劇を中心に、石坂や尾崎はトラックで街頭情宣、上田は軍機閣誌『南十字星』の編集と、かれらはいへんよく働いた。そのなかで三木は主として言語問題を担当していたらしい。かれは実務のかたわらフイリピン大学の図書館から大量の本をもちだして、フイリピンの歴史と文化にかなする詳細なノートをつくった。それらの活動をつうじて、かれは日本語を知識人用の公用語とすべしという従来の考えを捨て、日本語の大衆化、さらには民族語そのものの日本化を主張するまでに急速に変っていったのである。

三木清というけつして単純ならざる哲学者の「転向」ととって、こうした変化がなにを意味していたのかを問うことはいまはしない。そのことを別にして考えれば、かれの主張が「学者語としての日本語」から「日本語の大衆化」とか「土語化」という方向へ変っていったことの背後には、かれがフイリピンをおとすれ、そこではじめて英語しかつかわぬ知識人と民族語しかしゃべらない大衆とのあいだの断絶という現実をせつして、びっくりした経験があつたにちがいない。それが私の

歳月」ものべている。かれらの成功はめざましかった。しかし、そこでもことばの問題は完全に解決されていたわけではない。

言語問題はしばしばタガログの俳優たちをもイライラさせることになった。かれらにはあまりにも長く英語にしたしんできたために、タガログ語を柔軟だが力づよい表現手段たらしめている本質、そのかぎりなく魅力的なニュアンスをつかまえることができなくなっていたのだ。タガログ語を英語風の舌たらずな発音でしゃべる俳優や、タガログ語にはない抑揚やいいまわしをつかう女優が見かけられた。それでも俳優たちは十分とはいえないまでも、タガログ語の語法や発音のしかたになれ、舞台の上でのびのびと自然にふるまっていたと見えるまどになつた。なにしろ（事態が急に変つたので）新しい表現手段になれる時間がなかつたのである。新しい？ そう。かれらはタガログ語世界に生まれついていたが、決定的な自己形成期に英語に移行させられ、自身のことばとの親密な関係を失なつてしまつていたのである。いまでもおなじことであるが、英語で教育をうけた人びと（俳

推測である。英語ばかりつかつていこううちに民族語のこまかなニュアンスがわからなくなるといふ。かといつて英語も自分自身のことばとはいえない。この時期のフイリピンの知識人のおおくはひとしくそのような宙ぶらりんの状態におかれていた。この状態を自撃して、日本語を英語みたくしてしまつてはまずいと、頭のいい三木は次第にそう考えるようになってはなないだろうか。そこからまっすぐ日本語の大衆化とか民族語の日本化とかの方針がでてきたのではあるまいか。

英語を追放したタガログ語を奨励する占領軍の方針に不意にぶつかつて、知識人たちはあわてふためいた。タガログ語の作家たちの活躍する場がふえる一方で、これまで英語で書いていた作家や詩人たちは食うためにタガログ語の翻訳者をさがさなくてはならなくなつた。作家だけではない。戦前のマニラではボダビルやステージ・ショーなど、大衆的な演劇がすべてタガログ語で上演されていたのたいして、日本でいえば新劇にあたる正統派の演劇は主として大学の構内で、英語によつて演じられていた。その中心がイエズス会系のアテネオ・デ・マニラ大学であり、ミゲル・ベルナルの『アテネオ・デ・マニラの演劇』

優をふくむは、タガログ語より英語のほうがよくできると主張するのがふつうだった。そのおろかさや気づかされると、かれらは深刻な危機におちいる。すべてを一からやりなおさなくてはならない。しかもこんどはたえざる自己批判という苦痛がついてまわるのである。

日本軍の言語政策はフイリピン文化の全域で民族主義的傾向をつよめる結果になつた。アゴンシリヨもみとめていようように、それは否定することのできない歴史的事実なのである。「マニラはさ、日本の占領にもいい面があつたつていってたよ」と、フイリピンから戻つてきたばかりの黒色テントの女優のひとりが私にいつた。マニラというのはPETAの若い劇作家マニエル・バンビットの通称である。「ふーん、なんでかね？」とさくと、彼女はこたえた。「あの占領でフイリピン人のナシヨナリズムがめざめさせられたんだつて」。

たしかにマニラはそう考えているのにちがいない。しかし、そのようにかれが（あるいはアゴンシリヨが）考えているということによつて、当時の日本軍の言語政策や文化政策

によれば、この大学でラジオ放送をやつていたアマチュアたちを中心に、一九四三年、ドラマティック・フイリピンネスというタガログ語のプロ劇団が結成される。要するに占領下のマニラでは「あらゆる劇場芸術がホンモノの花を咲かせたのだ」とかれはいう。「プロフェッショナルな公演がすべてタガログ語でおこなわれた以上、それはもちろんタガログ語演劇のルネサンスであつた。ヨーロッパやアメリカの戯曲も翻訳されたが、中心はあくまでもオリジナルの台本だつた」。

一九四三年というのは、ラウレルを大統領とするフイリピン共和国が日本軍のあとおしによつて成立した年である。これを記念してフイリピン国立劇場が発足し、ドラマティック・フイリピンネスは、オペラやサルスエラを専門に演じるミュージカル・フイリピンネスとともにその専属劇団になり、メトロポリタン劇場を本拠に『シラノ・ド・ベルジュラック』や『ジュリアス・シーザー』などの戯曲を上演した。「この時期を特徴づけるナシヨナリティックな気分は、フイリピンの文化界から英語を排除せよという日本側からの激励にあおられて、ドラマティック・フイリピンネスを生んだ」とテオドロ・アゴンシリヨの『宿命の

がほんのすこしでも正当化されるわけでないことはことわるまでもない。かれの発言はおそらく二重の意味をもつていられる。その二重性は、さきほどふれた日本軍の占領政策の公式的枠組みと本音との二重構造に対応しているのだと私は思う。フイリピン人のナシヨナリズムは、日本軍の主張の枠組み（民族意識の覚醒）をそのまま受け入れるいっぽうで、その本音（日本を盟主とする大東亜共栄圏の建設）を拒み、はぐらかすというしかたで徐々につよめられていつた。それがかれの発言の背後に想定できる歴史認識である。しかも、その二重のプロセスはかならずしも矛盾なく調和していつたのではない。ときにはタガログ語の作家たちが英語で書く作家たちによつて、日本軍への協力者、すなわち民族的裏切者として白眼視されるような屈折した事態も生じていつたらしい。「もともとタガログ語で書いていた作家たちはつぎのように確信していつた」アゴンシリヨはいう。「やがて正常な時代にもどれば、英語づかいたちのほとんど全員が英語による文章活動を再開するにちがいない」。不幸にもかれらの予測は的中した。ミゲル・ベルナルのいう「タガログ語演劇のルネサンス」は、戦争がおわつて、フイリピン文

化が英語とアメリカ映画へとなだれをうって復帰していくなかで、あえなく中絶させられてしまった。そして、ようやく一九七〇年代以降、かつての外発的な（それゆえに中途で挫折せざるをえなかった）ルネサンス運動を批判的に継承しなおそうとところみはじめたのが、PETAやベーン・セルバンテスなどの新世代の演劇人たちだったのである。外国の軍隊によってタガログ語復興を強制された弱さの自覚にたつて、その強制されたタガログ語によってこれらの先輩たちが日本軍にどうたちむかっていたかを検証し、こんどこそ自分たちの力で本物の「タガログ語演劇のルネサンス」を実現しようとする。それがかれらのいまやろうとしていることなのである。

ドラマティック・フィリピンは外国戯曲の翻案ばかりではなく、『バヤン・コ（わが祖国）』をはじめとするオリシナル台本をも積極的に上演した。そのおおくは対スペイン革命を素材に民族の独立を呼びかける歴史劇だったようである。そして観客は劇中のスペイン王国をただちに大日本帝国と読みかえ、芝居がクライマックスにさしかかると総立ちになって拍手をおくった。

これらのタガログ語劇にこめられた寓意は

実的な理由がある。かれらの仕事を手づかったのは日本人通訳だけではない。「日本人はタガログ語になじみがなかったので、フィリピン人の文筆家を検閲係としてやとった」とアゴンシリヨはのべている。日本人検閲官のために英文でレジュメをつくるのがかれらの役目だった。当然、ゲリラはかれらを「協力者」として非難した。しかしこの非難はかならずしも正当ではないというのがアゴンシリヨの意見である。なぜなら「かれらは青鉛筆を好き勝手にふるうどころか、ときには、詩やエッセイにこめられた二重の意味を主人たちの眼からまもる努力をいとわなかったのだから。たぶんそのとおりだったのだろうと思う。その証拠といえるかどうか、最近になって私は徴用作家たちの手になる昔の文章をいくつかかまどめて読む経験をもった。そのなかでつぎのような街頭情景の場面が、つともよく印象にのこった。

……リパへ来ると、広場に住民が大勢あつて演説を試みた。多少日本語がわかつていふのでルスが通訳することになったが、望月少尉の演説は堂々たる内容を備へて、

きわめて明白なものだった。にもかかわらず日本人検閲はそれを読みとりそこねてしまった。検閲があまかったからではない。それは十分にきびしかった。「実際の検閲はそのつどの検閲班のメンバーによって、この国に長く住みタガログ語を理解できる日本人通訳の手を借りておこなわれた」と見元恵は「日本占領下のフィリピン演劇（『フィリピン・レヴュー』）という論文のなかで書いている。

「新作を上演するさいには題名を登録し、台本のシノプシスを提出しなければならなかった。そして劇場側は初日の一日か二日まへのリハーサルに検閲官をまねき、公演の最終的な許可をとるきまりになっていた。しかもアドリブによる日本批判をおそれ、憲兵や検閲官がしばしば公演中の劇場をおとすれていた。それなのになぜかれらはこれらの劇の真意を読みとることができなかったのだろうか。

考える理由は二つある。その一つは、当時の検閲が日本軍にたいする直接の批判にながらもの以外、フィリピン人のナショナリズムを原則として許容する方針をとっていたことである。寺見によれば、十四軍の二代目の情報部長だった齋藤大佐は、新国立劇場の機関誌『バック・ステージ』に寄稿して、「こ

民族の大理想を説いてゐる。ルスの顔にはいかにも困ったといふ表情がうかんできた。一区切りつくごとに彼は何か民衆に向つて通訳してゐるらしいが、うしろの方で拍手しながら、みんな顔を見合せてくすくす笑つてゐるので、同行の今君が、傍らにゐたフィリピンの新聞記者に、ルスは何と言つてゐるんだ、ときくと、「日本人は決して泥棒はしないぞ」と言つてゐるんです、といふ。あとでルスは人見中尉に今日ほど困つたことはないといつて述べ懐かしそうである。「実をいふと私には望月少尉の言葉はひと言もわかりませんでした。しかし、折角あんなに一生懸命にやつていらつしやるんですから、せめて拍手でもさせなくちゃいけないと思つて」。

これは一九四三年に小学館から出版された尾崎士郎の『戦影日記』の一節である。おなじような場面は石坂洋次郎の『マヨンの煙』などのなかでもくりかえしがかれている。広場のまんなかにとめたトラックの上で日本人が声をからして大演説をぶつてゐる。だが通訳はそれとはまったく関係のないことをタガログ語でしゃべり、群衆はゲラゲラ笑つて手

の国には誇るにたる舞台はただのひとつも存在しない。すべての演劇人はこの世界戦争のときにあつた、人民に精神的昂揚をもたらすべく奮闘努力せよ」というアジテーションをおこなつた。また演劇検閲班のある日本人班長（名前はわからない）も、おなじ雑誌で

「作者が過去と現在における民族の理想や信念をたくみにえがきあげた作品こそが、もつとも強力で効果的な演劇なのである」と書いているそうである。これらの発言はすべて政令第二号に定められた占領の基本方針にもとづくものだった。そして前記『バヤン・コ』をはじめとする外国勢力からのフィリピンの独立を主題とするおおくのタガログ語歴史劇は、おもてむきはこうした占領軍の意図に忠実によりそうしかたで上演されていたのである。なんとなくウサンくさい。だが、スペインやアメリカにたいするフィリピン人民のたまたかいを公然と否定してしまつては、聖戦の大義が失われる。こうして検閲官たちは「大東亜共栄圏」理念の形式的枠組みと本音との矛盾をつかれ、思わず知らず青鉛筆のホコサキをにぶらせてしまつたのであろう。

そしてもう一つ、日本人検閲官たちにタガログ語がまったく理解できなかったという現

を叩く。なぜかれらはこんなによく笑うのか、その本当のところかわからないので、日本人はだんだん不安になつてくる。いまこの広場で笑ひものになされてゐるのは、いちばんコックイイ存在なのは、もしかしたらわれわれ日本人ではないのか。そして考える。「結局言葉だけでもいいけないし、言葉につながる精神がどの様に大きく働きかけるかといふところにか」(尾崎)と。あるいは、「スペインはフィリピンに宗教を与へ、アメリカは教育を与へたと云はれてゐるが、私共日本人はまず彼等にアジア人らしい剛健な魂を吹きこんでやらねばならない。私共の演説に拍手喝采しなくともいいから、無言の中にジリ／＼応へて来るやうな民族的気魄を有たせてやらなければならぬのだ」(石坂)と。つまりは言葉より精神なのだ、広場のまんなかで孤立感にまみれながら、そうかれらは考えた。やつはちで、しかも誠実に。

これらの場面に登場するフィリピン人通訳たちは、かならずしも意図的にサボタージュをやつていたわけではない。だが結果から見れば、かれらもまた、十分にはいえないまでも、タガログ語を奨励した日本人たちをそ

のタガログ語世界のなかで孤立させコッケイ化してしまう役割をはたしていたのだ。

尾崎士郎や石坂洋次郎の文章には占領下の演劇への直接の言及はない。しかし、こうした街頭情宣の構図と、そこでかれらが味わったにちがいない孤立感を手がかりにして、マニラの劇場にたちこめていた空気を想像してみることができる。かれらを包圍した広場の笑いや拍手喝采にまっすぐながつていた。

日本人たちはやむをえず「言葉より精神だ」と考えはじめた。そしてかれらの考える「精神」は日本語という「言葉」と不可分のだから、その本当の意味は「タガログ語より日本語だ」ということであり、そこから「日本語の大衆化・土語化」という三木構想が生まれてくる。だが残念なことに、かれの壮大なヴィジョンが実現する機会はいやうってこなかった。もちろん日本軍がわずか三年でフィリピンを追われてしまったからである。かれらはむなしくフィリピンを去った。そう、ピンタとかケンペイとかのホンのひとにぎりの言葉「土語」のうちにのこして……ハッハ。

編集後記

高田馬場の古びたアパートの一室が陶文堂で、ご主人の斎藤さんがことし最後のふんばりを發揮して、カシヤカシヤと、ノヴァアコフスキーの小説の写植を打ちすすめている。

そのかたわらで校正の手をやすめて編集後記をかき、十二月三十日午後五時、印刷をやってもらっているトライ・プリントは、もう正月休みにはいったらしい。

写植屋さんの年末はいそがしく、二十九日までには終らせましょうといっていたのだが、どうやら三十一日ギリギリまで働かなくてはならない形勢である。

これまで斎藤さんとわれわれのあいだをつないで、影の編集デスク役をやってくれていた島田さんが大阪に引っ越していった。胃がいたくなるほど心をつかって時間をさぎこんでくれた人がいなくなり、『水牛通信』はやや不安づくみの四年目をむかえる。島田さん、長いあいだご苦労さんでした。

「ところで大丈夫ですか？」
「大丈夫ですよ。一月四日に入ればいいって、トライさんはいましたから」
「はあ……」

購読の御案内

*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

*申し込みと送金は郵便振替（口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二）または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということをお知らせください。

*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信

第五巻第一号
一九八三年一月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三（四二五）九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 ㈱トライプリントショップ